

# 日本IT書紀

## 062 その名はジーク

04 含牙篇  
卷之八 重濁

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第六十二

その名はジーク

一

日本の大本営は、アメリカ連合艦隊の殲滅と、マレーの迅速な攻略に重きを置いていた。

開戦初期にアメリカとイギリスに決定的な打撃を与えることは、太平洋の戦局を有利に運ぶ以上の意味があった。それによって、ヨーロッパ戦線におけるナチス・ドイツ軍の優勢を確定させ、短期間に有利な条件で太平洋戦線を終結できると見ていたためだった。そこでマレー攻略作戦では、飛行場の占領・確保と、敵航空兵力の壊滅に全力をあげた。

イギリス領マレーの連合軍兵力は、英国陸軍のパーシバル中将を総司令官に、将兵八万八千人、航空機二百五十四機だった。具体的にいうと、イギリス正規軍が一万九千六百人、オーストラリア第八師団が一万五千二百人、インド第三軍が三万七千人、マレー義勇軍が一万六千八百人だった。大日本帝国陸軍参謀本部は航空兵力を二割ほど多く、

陸戦兵力を二割ほど少なく見積もっていたことになる。配備されていたイギリス軍の航空機は、戦闘機が百十二、爆撃機が八十六、軽爆撃機が十五、電撃機が三十六、飛行艇が五だった。だが、戦闘機百十二機のうち五十二機、爆撃機八十六機のうち十五機は整備中で実戦に使用できない状態にあった。

極東軍総司令官のポーハム大將は対日開戦に備えて、歩兵二個旅団、爆撃機四戦隊、戦闘機二戦隊の増派を本国に求めたが、ロンドンではそれどころではなかった。ナチス・ドイツによる空襲を受けていたためだった。それでも極東軍には実動可能な航空機が百二十機以上配備されていたのだから、日本軍に痛打を与えることはできたはずだった。

ところが十二月八日、午前零時過ぎにインド軍第八旅団ドラグス大隊が太平洋戦争「最初の一発」を撃つてから数時間のうちに実動可能機数は五十機に減少し、翌九日には十機になってしまった。ほとんどが地上駐機中に日本軍機の掃射や投弾を受け、大破・炎上した。

このときイギリス極東艦隊司令長官（中将）トーマス・フィリップスは、

——艦隊を港湾にとどめておくのは危険である。と考えた。

彼が警戒したのは潜水艦による魚雷攻撃だった。艦隊主

力をシンガポール近辺にとどまらせておくのは、日本軍に好餌を与える以外の何ものでもない。

味方偵察機からの情報では、日本軍が動員している艦船は戦艦一、重巡洋艦二、軽巡洋艦二、駆逐艦二十だった。

対してフィリップス中将が率いる極東艦隊は航空母艦こそ欠けていたものの、超弩級旗艦「プリンス・オブ・ウェールズ」、巡洋戦艦「レパルス」以下、巡洋艦三、駆逐艦四、砲艦三を保有していた。

数においてほぼ互角である。

そこで彼は、艦隊決戦を決意した。

十二月八日午後五時半過ぎ、イギリス極東艦隊「Z部隊」はシンガポール港を出撃した。

十日午前零時五十二分、シンガポールの司令部から

「日本軍がクアantanに上陸中」

という報せが入った。

このため、艦隊は針路をクアantan沖に変更した。上陸作戦を遂行中の日本軍に、沖合から艦砲射撃を加えようというのである。

サイゴンの日本軍航空基地からは四百マイル（六百七十キロ）も離れている。

——であれば、日本の航空機の攻撃を懸念することはない。

とフィリップス中将は考えた。

ところが日本の航空機は、例えば零戦は最長で八百八十五マイル（千四百八十キロ）、隼は九百八十マイル（千六百四十キロ）を給油なしで飛行することができた。サイゴンからの四百マイルは、日本軍航空機にとってはぎりぎりだが射程圏内だった。

フィリップスは開戦初日と二日目に、イギリス極東軍の航空機を大破・炎上させた日本軍機が、どこから飛んできたのかを考えるべきだった。

アメリカから供与された戦闘機「バッファロー」について、ブルック・ポーハム大將が

「イギリス本土の防衛用としてはスピードが遅い。しかしマレーでは十分に間に合う」

と評価した背景には、有色人種に対するヨーロッパ人（ないし白人種）の過大な自信があった。

実際には、一九四一年九月十九日、フリーマンという駐華アメリカ大使館陸軍武官補（大尉）が、日本の新型航空機に関する情報を本国および、連合国に発信していたのだが、彼らは頭から信用しなかった。

いわゆる「フリーマン・レポート」がそれで、黄河上流の甘肅省蘭州上空で中国軍の対空砲火で撃墜された日本軍の軍用機についてだった。

レポートは

「日本機はすべて、蘭州から約四百五十マイル離れた山西省运城基地からやってきた」

と記し、さらに「タイプ・ゼロ」として

- ・ 単座追撃機、低翼単葉、全金属製。
- ・ 推定時速二百六十マイルで六時間の飛行をする。
- ・ 武装は、すべて固定式。
- ・ 機首にプロペラの回転と同調させた七・七ミリ機銃二丁。
- ・ 一丁当たり、通常弾、曳光焼夷弾、炸裂弾を約五百発装填。
- ・ 両翼に二十二・二ミリ機銃が二丁、それぞれに七十五発の銃弾を装填。

など、詳細なデータを収集していた。

細かな点で誤りがあったにしても、レポートは日本が驚異的な性能を備えた軍用航空機を実戦配備したことを告げていた。だがイギリス極東軍の首脳部は「日本がそんなに優れた飛行機を作れるわけがない」と決めてかかっていた。イギリス極東軍はそのツケを払わなければならなくなつた。

ナチス・ドイツの超弩級戦艦「ビスマルク」を航行不能にいたらしめたのが本国の航空機部隊だったことを、パリシバルやフィリップスは思い出すべきだった。

## 二

太平洋戦争の緒戦でアメリカ軍が得た教訓は、

——日本軍はバカにできない。

ということだった。大航海時代からこのかた、西洋ないしキリスト教白人世界が有色人世界との戦いにおいて、存亡の危機を実感する戦いを挑まれた経験はない。

ことに航空機の性能には目を見張るものがあった。イギリス極東艦隊が潰え、アメリカ太平洋艦隊が真珠湾に沈んでしまったため、連合国軍は制海権を失った。

そのいづれもが艦隊決戦によるものではなかった。例えば日清戦争でも日露戦争でも、あるいは第一次大戦における大西洋上でも、主力戦艦が真正面から砲撃を交わし、その結果が戦争の勝敗優劣に結びついた。

ところが今回の戦争は、航空機が艦隊を沈めていた。

それはヨーロッパ戦線でも同様だった。

ナチス・ドイツ軍が優勢にあるのは、メッサーシュミット社やフォッカーウルフ社の戦闘機が制空権を守っている

ためだった。すなわち、可及的速やかに建造しなければならぬのは航空母艦だった。一九四一年から四三年にかけて、アメリカが新たに建造した艦船を見ると、この考え方が現実反映されていたことがよく分かる。

また、アメリカ軍が着手したのは、航空機の増産だった。零戦に撃ち落されても、搭乗員さえ救出できれば新しい航空機で戦線に復帰できる。

一九四一年の七月から十二月にかけて生産された航空機は一万三千五十機だったが、一年後には倍以上の二万三千三十二機を生産している。自動車メーカーのラインが戦闘機生産のためにフル稼働した結果だった。

大量の爆弾を敵の頭上に落とし、大量の兵士や兵器を輸送できる大型機の増産と開発が本格化した。また新型戦闘機の開発が火急の課題となった。日本の「タイプ・ゼロ」に対して、従来の主力戦闘機「ワイルドキャット」は操縦性能、航行速度、旋回能力において、「P-51」は破壊力と航続距離において敵わなかった。

とはいえ、当面は「タイプ・ゼロ」と戦わなければならぬ。

まず戦闘機の改良が始まった。

コクピットの外壁と搭乗員の座席背後に分厚い鉄鋼の板が張られ、燃料タンクの内側に三重のゴム皮膜が施された。

分厚い鋼板が零戦の機銃を撥ね返し、ゴムの皮膜を施すことによって燃料タンクが被弾しても火が発生しなくなる。さらに翼に装備した機銃を大口径のものに変更した。

これらの措置によって長身で大柄な搭乗員は窮屈な思いをし、機体の重量がかさんで航続距離が短縮され、旋回性能が落ちた。だが搭乗員の生命を護ることができる。

次いで、新しい戦法が編み出された。

一つは「単機で闘うな」だった。

アメリカ軍は、ゼロ機にワイルドキャット二機で当たるようになった。戦法を編み出した少佐の名から「サッチ・ウィーブ」と名づけられ、アメリカ航空機戦力の壊滅を防いだ。

背後に付かれたら急降下で逃げろ、ということも徹底的に教え込まれた。

その一方、アメリカ南西太平洋方面軍は一九四二年一月、オーストラリアのメルボルンに「航空技術情報部隊」(TAIU)を設置するとともに、ダグラス・マッカーサー大将の名で太平洋に展開する全軍に次のような指令を発した。

「墜落した敵機の捕獲機体または残骸または搭乗員を、航空技術情報部隊が可能な限り速やかに完全な管理下に置く権限を持つことを承認する」

墜落した日本軍航空機の残骸から調査するのである。そ

のためにアメリカ軍は、日本軍航空機を運び出すマニユア  
ルを作って諸部隊に配布し、ばかりでなく専用の小型空母  
まで建造した。

ここに、フランク・マッコイという陸軍大尉が存在した。  
この人物が「タイプ・ゼロ」の全貌を解明していくことにな  
る。

三

日本軍の零式戦闘機（零戦）に関する記録は、数多く残  
されている。

両翼幅約十二メートル、全長約九メートル、全重量約二  
千五百キログラム、二〇〇〇ccのエンジンで最高速度五  
百四十キロ／時、航続飛行距離一千五百キロという性能は、  
太平洋戦線の緒戦時、おそらく世界で最高レベルにあった  
といっている。戦記は零戦がいかに優れていたかを語り、  
設計と開発の辛苦が伝えられる。

実際、制式採用された最初、中国大陸で行われた空中戦  
で、零戦は三十機で敵戦闘機三十七機を撃墜、被弾ゼロと  
いう華々しいデビューを飾った。赤松貞明、武藤金義、岩  
本徹三、杉田庄一、西澤廣義、坂井三郎、笹井醇一、太田  
敏夫、水谷竹雄、本田敏秋といった多くの撃墜王が誕生し

た。

零戦乗りでいちばんの暴れん坊として知られた赤松は、  
戦後、酒に酔うと

——オレは三百五十機以上を撃ち落とすとした。

と自慢した。その中には地上に駐機してあった敵機も含  
まれているらしい。ただ一九四五年五月二十五日に、千葉  
県上空に侵入したアメリカ軍「P-51」（ムスタング）七  
十五機の編隊に単機で突入したのは、紛れもない事実であ  
る。その戦いで一機を撃墜し、自身は無傷で厚木基地に帰  
ってきた。

岩本徹三は、二百二機を落とすとした、と主張している。ラ  
バウル航空隊のエースであって、

——機体の色が違って見えた。

という逸話がある。桜色の撃墜マークが機体を覆うまで  
に描きこまれたためだった。

当人の主張と日米双方の正式な記録がほぼ一致するのは  
坂井三郎である。彼が撃墜した連合軍航空機は六十四機と  
されている。

一九四二年の五月、ポートモレスビー攻撃に出撃した彼  
は、部下の西澤廣義、太田敏夫とともに零戦三機で編隊を  
組み、敵基地上空で宙返りをやってのけた。数日後、ポー  
トモレスビーの連合国軍陣営から、

「先日の宙返りは素晴らしかった、今度来るときは緑色のマフラーをつけてこられたし」

という手紙が届いた。

——撃ち落して進ぜよう。

というのである。

谷水竹雄は日本の劣勢が明らかになった四三年後半、ラバウル航空隊のエースだった。

「機動性に富み、迅速に横転ができるヘルキャットがいちばん手強かった。その点、小回りが利かないF4U、P—38は一撃離脱で容易に撃ち落すことができた」

と語っている。B—29を含め、計三十二機の撃墜が記録されている。

こうした記録は、零戦の優れた戦闘性能と突出した個人技によって作られた。だが工業製品として見たとき、果たしてどうであるか。

三菱重工業名古屋航空機製作所（名航）の堀越二郎は優れた技術者だが、軍が要求する性能を実現するために精緻に作りこんだ。精緻というだけでなく、生産に従事したのは動員された女学生だったりした。このために量産が難しくかった。

近代戦で量産が難しいということは致命的な欠点だった。それは堀越の問題ではなく、量産を前提にした性能要求を

設定できなかつた日本の軍部の欠陥だった。

#### 四

フランク・マッコイは一九三七年にオクラホマ大学の法学科修士課程を卒業し、いったんは弁護士になったが日米開戦を機にカンザス州の陸軍大学将官課程に進んだ。陸軍大学ではわずか六週間で卒業の扱いとなり、大尉に任官した四二年一月、航空技術情報部隊に配属された。航空技術情報部隊の初代隊長に任命されたのだった。のち、彼は陸軍少将にまで昇進して退役している。

ちなみに同名の陸軍軍人「フランク・ロス・マッコイ」がいる。この人も最終階級は少将だが、一八七四年にペンシルベニア州ルイスタウンで生まれている。一八九八年の米西戦争（アメリカ対スペイン帝国）、第一次大戦に従軍したほか、一九二三年九月に発生した関東大震災の救援作戦の指揮を執り、リットン調査団のアメリカ代表、極東委員会議長を務めるなど日本とも縁が深い。

同部隊の任務は、太平洋の島々で捕獲された日本軍の航空機の残骸を調べ、捕虜になった搭乗員にインタビューすることだった。まず彼は日本軍の航空機を型式に分類し、それぞれに短いコードネームを付けた。そうすることで最

前線の将兵は敵機を見分け、後方部隊に適正な情報を発信しやすくなる。

零戦は「ジーク」と呼ばれるようになった。

最初のころ、アメリカ軍に若干の混乱が生じた。フランク・マッコイが「ジーク」と名付けた戦闘機とよく似た、しかし翼の形状や機体の大きさが異なる戦闘機が目撃情報が各戦線から次々に寄せられたためだった。

そこで彼は、戦場で撮影された日本軍航空機の写真を詳細に調べ、分類する作業を行わなければならなかった。同じ機体であっても、迷彩の塗装や目撃した角度によって全く別の機種に見えることがある。

その結果、マッコイは「ジーク」が用途に応じて様々に改良・改造されていること、搭載するエンジンも異なっていることを解明した。陸上基地から飛び立つ場合は翼は長く、三十キロ爆弾ばかりでなく魚雷を懸垂できるように改良されていた。

対して空母艦載用に翼の端を切り落としていたモデルもあった。あるいは速度を重視するモデル、積載爆弾を重視するモデルなどがあつた。さらに年式によって微妙に形状が異なつた。

同じ零戦であつても、九百四十馬力の栄十二型空冷二重星型十四気筒エンジン搭載の「二一型」と、一千百三十馬

力の栄二十一型空冷二重星型十四気筒エンジン搭載の「三二型」では、翼の長さが一メートルも違つていた。マッコイが「ジーク」と名付けたのは四三年四月に実戦配備された千百三十馬力の「五二型」だった。

次に彼がしたことは、太平洋の島々で捕獲した零戦の残骸をかき集めて、飛行が可能な機体を復元することだった。このためにマッカーサーは、太平洋に展開する全アメリカ軍に、日本軍航空機の残骸を発見したときどう対処すべきか、厳しい規律を傳達している。

発見された機体の残骸は専用の小型空母でブリスベーンの空軍基地に輸送された。そこで復元したのち日の丸が塗りつぶされ、アメリカ軍機であることを示す星のマークが付けられた。

星のマークが付いた零戦は実際にアメリカ本土の空を飛んだ。一九四二年三月に復元機はアメリカ陸軍の戦闘機「P-40」や「P-38」と擬似戦闘を行った。こうした作業を通じて、零戦は次第にその性能や弱点が解明されていった。

同じころ、アリューシャン列島のアラスカに近いアクタオン島で、アメリカ軍にとつては奇跡的に幸運な、日本軍にとつては決定的に不都合な発見があつた。ほとんど無傷の零戦が発見されたのだ。それはアクタン島の浜辺の泥湿地



に、車輪を空に向け、仰向けになっていた。

カリフォルニア州サンディエゴ基地に搬送されたのは八月十二日である。

戦後になってこの機は、一九四二年六月四日、アリユーシャン諸島ウナラスカ島のアメリカ軍港ダッチハーバーの攻撃に、空母「龍驤」から飛び立った古賀忠義という一飛曹が操縦していた「零式艦上戦闘機二一型」ということが判明した。発見された鳥の名にちなんで「アクタン・ゼロ」もしくは古賀飛曹の名にちなんで「コガのゼロ」と称される。

古賀一飛曹は対空砲射で被弾し、味方の潜水艦が救助にくるようになっていた不時着予定地に向かった。アクタン鳥がその指定地だった。ところが彼の零戦は着陸したとき、深い泥湿地に脚を取られ、もんどりうって反転して停止した。

このとき古賀一飛曹は首の骨を折って死亡してしまった。不時着した場合、日本軍は機体に火を放ち、場合によっては自決するよう、搭乗員たちを指導していたが、本人が死亡してしまったのでは機体の処分ができるはずがなかった。

日本軍はその後、古賀機の搜索が続けたが、濃霧のため発見できなかった。これをアメリカ海軍の哨戒機PB Yカタリナが偶然に発見した。不時着から三十六日後のことだ

った。これでアメリカ軍は完全な状態の零戦を確保し、その強さの理由と弱点を徹底的に解明していくことになる。

零戦の復元という大仕事を果たしたマッコイ大尉は、次いで四三年の夏に日本陸軍の隼も復元したが、もう一つ、もっと重要な仕事を果たした。

捕獲した日本軍航空機の残骸に刻印されている記号や数字を収集し、そこに潜んでいる意味を読み取るうとしたのである。彼は捕獲した残骸から得られた記号や数字を、サンフランシスコ市に本部を置いていた太平洋地域統括情報センター（JICPOA）に送った。

JICPOAはそうして得られた情報をIBM 405にかけ、暗号を解読すると同じ要領で詳細に分類・集計した。その結果、エンジンに付けられている番号と機体に装着されているプレートの番号などから、零戦の生産機数を型式ごとに推定できるようになっていく。

例えばJICPOAは、機体に付いていた番号から「ジーク」の生産拠点を割り出すことに成功した。「M」は三菱重工業、「N」は中島飛行機、「A」は愛知航空機、「K」は川島航空機、「W」は九州航空機、「Y」は航空技術廠、「P」は日本飛行機といった具合だった。

またJICPOAは一九四二年における零戦の生産機数を、粗鋼や部品の供給能力などを勘案して

一月…七五  
二月…七八  
三月…七八  
四月…八一

と推定した。

戦争が終わって、G H Q 戦略爆撃調査団に対して三菱重工業と中島飛行機が明らかにした実際の生産機数は、

一月…七九 (推定値との差…四)  
二月…八〇 (同二)  
三月…九〇 (同十二)  
四月…八五 (同四)

だった。

四か月間の総生産機数は実数三百三十四機、J I C P O A の推定値は三百十二機で、二十二機しか変わらない。墜落した機体からの推測とはいえ、これはもう「誤差の範疇」といっている。

## 補注

太平洋戦争「最初の一発」 日本時間の十二月八日午前零時を期して、マレー攻略のために編成された第二十五軍(司令官・山下奉文)の第五師団がマレー半島のシンゴラ、バター、コタバルの三か所に上陸した。シンゴラ、バターは無血上陸を果たしたが、コタバルでは戦闘が行われた。

コタバルに上陸したのは第五師団所属の第二十三旅団陀美支隊五千三百人だった。沖合いから近づく上陸用舟艇(ダイハツ)のエンジン音が気がついたコタバル航空基地の守備についていたインド軍第八旅団のドグラス大隊は、日本兵が上陸を開始するのを待って引き金を引いた。これが太平洋戦争「最初の一発」となった。日本軍による真珠湾奇襲攻撃より一時間二十分早かった。

クアンタン Kuantan…シンガポール北方、マレー半島東海岸の浜辺で現在は観光地になっている。地名は十五世紀のキリスト教布教者クアンタン・ヴァン・デーン・ボリストによる。

戦闘機「バッファロー」 制式採用後の名称は「ブリュースター/F2A バッファロー」。アメリカ海軍に配属された最初の単葉機で、一九三六年に策定された海軍次期艦上戦闘機の要求仕様(単葉機、折りたたみ翼、引き込み脚、密閉式コクピット)に沿ってブリュースター社、グラマン社、セバスキー社が競争試作に参加し、ブリュースター社が受注に成功した。航続距離約一千二百七十キロ、最大速度二百九十五キロ/時、十二・七ミリ機銃四基を装備し、最高高度は六千メートルだった。実際はそれよりかなり遅かったといわれる。

一九四一年九月十九日 零式戦闘機が実戦に投入されたのは一九四一年九月十三日で、この直後に中国軍の対空砲火で一機が撃墜されている。フリーマンの記録はそのとき撃墜された零戦を調査したものであった。しかし巡航速度や機銃の口径などに誤認がある。

戦艦「ビスマルク」 第二次世界大戦におけるナチス・ドイツ海軍の軍艦。一九四〇年八月二十四日に就役し、四一年五月二十七日イギリス海軍潜水艦の魚雷と自沈用爆薬によって沈没した。五月二十四日のイギリス艦隊との砲撃戦は勝利したが、二十六日イギリス空母アーク・ロイヤル艦載機との戦いで浸水、舵が動かなくなり速度は最大七ノットと動きが取れなくなった。二十七日朝、イギリス海軍の戦艦キング・ジョージV世、戦艦ロドニーなどの砲撃戦で「浮かぶ廢墟」となった。

アメリカ海軍の新造艦 日米開戦のちアメリカ合衆国が、新たに建造した戦艦は八隻、重巡洋艦は四隻なのに、航空母艦は七隻、軽空母は九隻、護衛空母は二十九隻である。また新造艦のうち駆逐艦が二百七隻、護衛駆逐艦が百九十九隻、潜水艦が八十八隻というのは、空母+駆逐艦+潜水艦の組み合わせを軸に艦隊を編成するようになったことを示している。海軍の戦いが大きく変わりつつあった。

戦闘機「P-36」 もと「カーチス・ホーク75」と呼ばれ、初期モデルは翼に機銃を装備していなかった。のち両翼に七・六二ミリ機銃各一基を装備し、「P-36C」の名で制式採用された。太平洋戦争勃発時にはすでに時代遅れとなりかけていたが、真珠湾に襲撃した日本海軍攻撃隊に対して唯一の反撃を行い、九七式艦上攻撃機二機を撃墜している。

サッチ・ウィーブ この戦法を最初に考案したのはフライング・

タイガースのクレア・シェンノート准将(1893~1958)だったといわれる。空母「サラトガ」配属の航空隊司令だったジョン・S・サッチ少佐(1905~1981)と僚機を操縦していたオヘア大尉はシェンノート准将の助言に工夫を加え海洋上での戦闘諸要素を加味して改良した。彼の名を取ってこの戦法は「サッチ・ウィーブ」と呼ばれた。

サッチ少佐はのち海軍少将に、オヘア大尉は少佐にそれぞれ昇進したが、オヘア少佐は戦闘で行方不明になった。シカゴ・オヘア空港の名は彼にちなんでいる。アメリカの戦闘機は重く頑丈だったため、急降下だけは零戦に負けなかった。

**赤松貞明** あかまつ・さだあき/1900~1980。中国戦線で活躍した古豪で、撃墜機数をカウントする習慣がなかったため正確な数は分からない。当人の申告によると三百五十機以上という。第二次大戦後は酒におぼれ、かつての戦友、僚友に借金を繰り返す生活だったといわれる。

**武藤金義** むとう・かねよし/1916~1945。愛知県に生まれ日米開戦時は第三航空隊でフィリピン航空戦、ジャワ島攻略など初期の作戦に参加した。のち横須賀航空基地で教員になる。カダルカナル戦に伴いラバウルに進出し撃墜王となった。四五年七月二十四日豊後水道上空の空中戦で撃墜され戦死した。死後特進して少尉。「大空の武蔵」の異名を持つ。

**岩本徹三** いわもと・てつぞう/1916~1955。九六式戦闘機に乗り中国戦線で数機を撃墜したのを皮切りに、四一年十二月八日の真珠湾攻撃には空母「瑞鶴」の航空部隊で参戦、四二年四月にはインド洋、五月には珊瑚海海戦と転戦した。のち大村航空隊、横須賀航空隊の教員任務に就き四三年十一月戦場に復帰し

ソロモン方面転出を経てラバウル航空隊で活躍した。四四年二月ラバウルから撤収しトラック島、木更津、岩国、国分基地と転戦し、岩国基地で終戦を迎えた。自身の記録によると撃墜数は二百二機にのぼるといふ。

**杉田庄一**すぎた・しょういち/1925~1945。新潟県に生まれ四二年十月ラバウル航空隊に所属し四三年四月山本五十六司令長官座乗の一式陸攻を護衛した零戦六機の一だった。四三年八月戦闘で重傷を負い内地に送還されたのちマリアナ諸島方面、フィリピン方面を転戦して内地に帰還。四五年四月戦死した。撃墜数は七十機とされる。

**西澤廣義**にしざわ・ひろよし/1920~1944。長野県に生まれ地元を生糸工場に勤務していたとき徴兵となり横須賀航空隊に入った。四一年千歳基地勤務ののち四二年ラバウル航空隊に配属され、坂井三郎、大田敏夫と編隊を組んだ。四四年航空機受領のため輸送機で移動中、撃墜され戦死した。百二十機の撃墜が記録されている。

**坂井三郎**さかい・さぶろう/1916~2000。一九三八年中国戦線で九六式艦上戦闘機部隊に配属され試験飛行間もない零戦で戦果をあげた。日米開戦とともにフィリピン攻撃に参加、のちラバウル航空隊で撃墜王となったが四二年七月戦闘で重傷を負い内地に送還され飛行教官となった。四四年硫黄島に赴き空中戦でアメリカ軍攻撃機を撃墜。さらにポツダム宣言無条件受諾後の四五年八月十七日、横須賀上空に飛来したアメリカ軍爆撃機を撃墜している。大日本帝国海軍航空機最後の戦いを演じたことと知られる。

撃墜した連合国軍航空機は六十四機とされるが、列機を損失し

なかつたこと、搭乗機を一度も不時着なく無事着陸させたことなど名パイロットとして多くの逸話を残している。第二次大戦後は日本通運に勤務したのち印刷業を開くかわらアメリカ空軍などに招かれ講演や著述を行った。著書『天空のサムライ』がある。

笹井醇一 ささい・じゅんいち／1918～1942。東京に生まれ四一年海軍兵学校を出て台湾の台南航空隊に配属され小園安名の下で航空機操縦の特訓を受けた。日米開戦と同時にフィリピン攻撃に参加し、以後、ボルネオ、スラバヤ、ジャワを転戦し四年ラバウルに進出。同年八月二十六日ガダルカナル島上空で撃墜され戦死した。撃墜した連合国軍航空機は五十七機以上とされる。二階級特進して少佐。

太田敏夫 おおた・としお／1919～1924。「利夫」と記す資料もある。西澤廣義、坂井三郎とともに「ラバウル三羽鳥」の異名を取った。撃墜数は三十四機と説と五十機とする説がある。日本の撃墜王たちについて撃墜機数が曖昧なのは、日本海軍が個人の戦果を評価しなかったことよってである。

戦闘機「P-51ムスタング」 ナチス・ドイツ空軍に劣勢を強いられたイギリス政府がスピットファイアに代わる主力戦闘機の開発をアメリカ政府に依頼し、ノース・アメリカン社が四か月弱で開発した。機体は流線型で、最高速度は七〇三キロ／時、航続距離は千五百三十キロだった。アメリカ軍は太平洋戦線で零戦に對抗するため改良を重ね、ついに零戦を圧倒した。

余談だが日本も零戦の後継機として高速・高高度での戦闘が可能な局地戦闘機「飛燕」を開発した。この機影がちよっと見るとムスタングと類似していた。このためアメリカ軍機が味方機と誤認したケースも多々あったらしい。

日本軍機の通称 「ジーク」と同様に、九七式艦上攻撃機は「ケイト」、九六式陸上攻撃機は「ネル」、一式陸上攻撃機は「ベティ」、隼は「オスカー」、九七式重爆撃機は「サリー」、重爆撃機「呑竜」は「ヘレン」と名づけられた。戦闘機は男性名、攻撃機や爆撃機は女性名で呼びやすい名前を付けることによって、戦場の兵士たちは日本軍機を識別しやすくなった。

# 日本IT書紀 062 その名はジーク

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。